明治卅八年一月十四日 第三種郵便物認可

朝鮮日報

紀元二千五百六十五年
韓曆光武八年
陰曆甲辰十二月廿一日

定價　壹ケ月金參拾錢
廣告　五號活字十九字詰 壹行壹日金拾三錢　三日以上金七錢　五日以上金五錢

發行兼編輯人　[illegible]
印刷人　段塚[illegible]

發行所　韓國釜山港大廳町二十七番地　朝鮮日報社

京釜鐵道 行列車 出發時間表

[illegible]

日報論壇

義勇艦隊建設に就て釜山居留民に告ぐ

[illegible]

……也。（黑潮）

朝鮮狩獵案內（三）

美肆公

[illegible]

その三十余戸皆上漁洒たる一亭あり春朝秋夕眺望に佳絶にして慶尚道中の名勝よ數へらるゝ所也此地の住民多くは酒類を以て業を營み戸少しく之に亞ぐ又た鯉魚の産を以て名あり殊に冬季に至れば二三尺大のもの常に其岸邊に絶へず一日狩獵の疲勞を此鯉肉と一杯の酒醪とに慰するもの亦た旅中の一興ならずや

（二）梁山　梁山停車場を降りて南歸すること約十町許[illegible]から孤浦川條へに溯ると一帶の芦の繁生地で稍々進むと此邊にも可なりの鴨群が居る併し鴨が主で多少の雁鷺も居るが雁の方は當てにならない午前の滊車で草梁を立ち九時廿六分に同停車場に着し直ちに獵場に向つて約八時間許り狩り暮らし午後六時四十分の滊車で歸るとせずれば鴨の五羽や十羽は豫算中に置いても差支あるまい先づ日曜一日間の獵場としては適當な場所であらう

◎參考　獵場附近に於ける酒幕所在地は停車場北方數町龜浦江岸に在る勿禁更に其南約十余町を隔てる龜山及び停車場の東方約半里餘に在る甑山又た其東半里許にある梁山とにあり何れも宿泊及び食飯に便すべし然れども辟食に慣れざる者は行廚を携帶するに如かず。

（三）金海魚沼　三浪津停車場を降りて洛東江を渡り西の方約一里半許で廣濶の荒地と沼澤とに出づ之れが魚沼で雁、鴨、鵠の群游する所である蓋し此附近第一の好獵場であらうが此方面は惜むらくは目下軍令の爲めに尋常の行遊禁止の地點に當つて居るらしいので徒らに諸君が心に煩悶を起さしむるに過ぎざるを恐れるから何れ來年度の解禁でも待つて静かに御案内致さう

今昔の感

對馬嶋露艦暴狀事件（五）

大東彈吾氏談、社員筆記

段々日數が經つて我は彼を知り彼は我を知るといふ稍敵情を融和する樣になつた彼は初めの鹽對に似ず頻りと歡心を得る事に勉めた金錢を湯水の如く散じて施す買ふさいふ譯である斯して彼は士民を僞にして野望を遂げむとするのであらう我國民は果して彼が術中に陷る非國民があるであらうか

或日の事であつた自分は艦中に遊んで居たすると艦長の招きより美麗なる一室に饗者を馳走せられた頗る美味である昔て味た事なき美酒であるがいふ三鞭酒だろふ頻りに重ねて非常に酔た甲板に出て風に吹かれて居ると酔はまず〳〵發して頭痛益々苦悶堪へ難き程であると一人の士官が出て來てコツプを持ち水を充分に入れて何か白き粉を投じた水は直ちに沸騰した彼は一口に呑み干して自分にも勧めた自分は其時斯う疑ふた酔に乘じて毒藥を與へられると恒んだのである、醫官は洪然と笑ふて他の水兵を招き三四人にて無理無躰に自分に呑ました自分は觀念した一瓶の酒故生命を落らゝと自分は敢なき毒死を獣はない只日本の武士が御馳走故に生命を奪られては如何にも残しいと思はれて口惜いと無念の歯噛をしたのである少時にしてゲフリと胸が空いて嘔かでた必然血だろうと思ふて吐き出しら何の事もなかつた却て頭痛が去り胸が晴々して來た、馬鹿〳〵しい夫れより今の[illegible]散であつたらしい

閑話は少し多過ぎるが是れは頗る趣味ある話しである或る時快晴の日を擇び日落の端艇競漕會があつた今なら何も怪む事はないが其時は頗る奇躰である露は今のボートだ水兵十人を乘せ櫂で漕く此方は磯船で五人の漁師が櫓を動かして競爭するのだ彼は艦長を初め士官等一同甲板に出て滿面微笑を浮べてる此方は士族連を初めとし附近の村民群集して口々に罵り叫いで居る指揮官か旗を振ると揆手は一樣に漕ぎだした一進一退船は枯葉の狹風に飜るが如く瞬く間に沖に出た揆手は今や一生懸命である恰も國家の榮辱を一身に荷ふが如き意氣組で叱咤激勵を起し聲を呼び片々として見えては隱れ隱れては見ゆ忽ち標的より方向を轉じて引返してある群衆は片唾を呑んで居れよ〳〵と怒號して居る初めは相隔離して優劣がなかつた事ろ露兵に益進の勢があつて我は一樣に胸を躍らした而も挫ちず撓せず慾搦として百練の腕を有せる我漁夫は一歩更に一步勇氣ますます〳〵奮發し恰も海神の暴れたるが如く猛進更に猛進最後の戰線に至り遂に彼を突出して名譽の月桂冠は我頭上に下た此時歡呼聲く如く海濤に響きて愉絶快絶何者か比すべからざる快感に打たれてあつた此方の喜びに反して彼の失望落膽は非常な者で斯る時饑憒を洩らすは彼の殊長である彼等は甲板に何事か怒號してあつたが見る〳〵檣頭より百尺計りの大帆網を下して突然我戰勝の磯船に二重三重捲き付たのである、アワヤ彼は滿滅の無限力を以て此磯船を戰勝の人々と共に沖天に吊し上げ驚き騒ぐのを見てせめてもの腹癒さんとするのである此方は一樣に喫驚したアレョ〳〵と罵り叫ぐと此時競爭船に乘り込みて指揮し居たのは河村宗三郎一番に有名の劍士である此有樣を見て怒氣心頭に發し見る〳〵眼中血を漲ぎ紫電一閃一聲叫んで切揮へば驚くべし彼が寸餘の帆網四本迄一齊に水も溜らず切放したのは凄といはんか慘といはんか群衆寂として彼又しばし茫然たる計であつた露艦は悠々として歸つた斯る際斯樣の勇氣と手練を搭ふは我國民の特有よして此時より既に露國を呑むの概があつたのである

特別廣告

義勇艦隊建設寄附金募集廣告

我帝國海事協會ニ於テ經畫セル義勇艦隊ノ創設カ帝國現下ノ狀態並ニ將來ニ對シテ尤モ重要ニ又尤モ好個ノ壯擧ナル事ハ世人ノ共ニ異論ナキ所ニ可有之就テハ我港ニ於テモ此際應分ノ寄金ヲ致シテ該計畫ヲ補助仕度幸ニ此目的御賛同ノ諸君ハ速ニ奮テ續々寄金ノ中出アラン事ヲ請フ

明治三十八年一月廿五日　委員　有吉明

內規

一、寄附金ハ一口一圓五十錢以上トス
一、寄附金ハ釜山居留地ニ於テ取扱フ
一、寄附金ハ別ニ領收書ヲ出サス朝鮮時報朝鮮日報朝鮮毎日新聞ノ廣告ヲ以テ之レニ代フ

◉海軍力の增加　此程潛水艇隊新設され又た與に於て裝甲巡洋艦の建造中なるおとは既報の如くなるが我海軍力の增加は獨り是に止まらず艦艇事業の基礎既に確立したれば當局者に於ても以上の外尙ほ海軍力增加の計畫を立て既に着々進行中なりといへば早晩具體的に發表さるゝに至るべし兎に角我國民は其意を強くすべきなり

◉露國紙幣の不信用　滿洲に於て流通せる露國紙幣は曩報にも見えし如く本年に入りてより大に不信用となり奉天鐵嶺開原の各市場に於て著しき澁滯を來し爲めに淸人は其受授を嫌忌するに至り目下一留に對し銀貨八十五錢内外に下落し尙益々下落の傾向ありといふ

◉亡國乃資格　是れは某國に就ての或肉皮家の批評であるが此國人には大体に於て左の亡國資格を備へて居るそうである其一は其國人の多くには骨相上後腦が無い事で波蘭人や印度人と同じく觀相家は之れを亡國相と命名して居る、其二は外國語を覺ゆるに巧みなる事で此國民は一般に外國語の記臆性に富んで居て中には眼に一丁字なき者が日淸露英四國語位に通じて居るものがある是れは心に主我の妨げ無き爲めで日本人の如く與國主我心の熾んなる國民には六ケ敷い事である、其三は自尊心に乏んずる事で上は歡樂と淫逸とに下は喫烟と賭博とに晏然其日を暮らして明日の事なぞは少しも御かまいなし是れは單り國を亡ぼす資格のみではあるまい、四は進取の氣象ゼロなる事で恥かしめられても奮發するではなし精神ある若文明の潮流に伍せんとするの氣象を起すではなし、打たれても蹴ぜられても唯々諾々大者の意に忤はざらんことをのみ心懸けて居るも他國人に對し弱者の已むを得ざるに出るとは云へ是はそうしても亡國の一資格である、其五は虛飾心盛んなる事でメカし飾り凡ての布令れ出しの仰々しさ、見ても所謂高標流の比では無い

詩

新年之作　在金海　金城生

允武允文盛運昌。辯雲佳氣新年征。
故山路隔三千里。起拜東方仰曙光。

夢　母

門前忽有老慈聲。攀背慇懃慰遠征。
夢覺遽然別燭起。釜城館外脳頻鳴。

寄金某氏

半島經營全不成。期君脱俗暢文明。
由來金海多遊蹟。[illegible]

俳句

梅　香洲

春寒し友の來らず夜は更けぬ　仝
春の家の娘お後と申しける　仝
師の坊の朝立おそき餘寒かな　仝
春寒き山を越ゆたる夜襲かな　仝

梅

水淺し石處々梅蹤なり　美瓢
梅咲て十歩を誇る庭の酒落　仝
主なくて書齋は開て梅薫る　八重女
梅植へて切る枝惜しき蕾哉　仝
臺樹や園姓廟に梅の咲く　黒潮
渓の家梅夕月に暮れんとす　仝

飜譯小說　佛蘭西騎兵の花（六）

英國　コーナンドイル作
日本　梅村隱士譯

幽鬱城の探險（つゞき）

世良田龍野二士官は引率せる騎兵を宿舍に就かせてから徐ろに郵便局を出た、それから幽鬱城と云ふ處までは、僅かに十四五町しかないのであるから馬に乘るに及ばず徒步で行くのであつた、二人は無論其長い劍を引ずつて行つたが世良田は殊更にピストルをズボンのポツケツトに押し込んで居るそは今晩の用事は乾度此樣な道具の入用があると思はれたので。

城に行く道と云ふのは闇く繁つた檜の木の林の中を縫ふてゐるので其下を通る二人よは只頭の上に僅かの空が見ゆる其處から微かに星の光が落ちる計りだ、而し程無く此暗闇から出ると直に眼の前に城が立つて居るのであつた。

城は廣大なもので頗る不恰好な塔が四角に聳へて隨分時代を經たものらしいろして二人の近づきつゝある方に四角な倉庫がある此異樣の建物からは只一つの燈火が窓から洩れてゐる計りそして物音とては少しもない其建築の廣大なのと物音の少しもしないのと思ひ合はすると幽鬱城と云ふ嫌な名の意味と頗る似合つて居るのであつた、龍野は世良田が斯んなとを思つて居る内にも熱心に進んで行くから世良田は表門の處に出る石原の小さ悪い小道を急いで續いて行ぐ。

門には呼鈴も無ければ相圖をする物も無い只鐵板で張つた頑丈な扉が閉まつて居るのを自分達の帶劍の尻で以て叩くより外に仕方がなかつた、すると瘦せた蔑の樣な顔をした男の耳元迄斷髪の生へたるが遂に戸を開けて呉れたが片手には下げランプを持ち片手には索的に大きな黒犬の頸に付けたる鎖を握つて。

『外部男爵はこんなに夜遅くなつてから來客に面會は致しませんです』

と其男は流暢なる佛蘭西語で云つた。

龍野『我々は男爵に面會するつもりで八百リーグの道を歩ひて來たものであるから面會するとが出來なければ此處を立去らない決心だと男爵に取次いで呉れ』

龍野の此熱心なる言葉と其威嚴ある擧動とは自分には到底六ケ敷い事だと、世良田は心の中に思つた。

門番の男は二人を横眼にかけて困つた樣子をして其黒い下顋を撫で。

『實の處男爵は今頃はお酒を少し飲んで居ますから明朝面會お出になつた方が貴下の方に都合の好いだらうと思はれますから』

門番は此時扉を少し餘計に開いたから世良田は門内の樣子を見るとが出來たがランプの光りに照し出されたものは三人の荒くれ男で其内の一人は巨犬を連れて居ると門番と同樣であろ、龍野も亦此有樣を見たに相違ないが其決心には何等の影響を與ゆべしとも見へず。

『話は解つた』

門番を押しのけて龍野は門の内に入込まんとして。

『お前では解らない用があるのは主人だ』

廊下に立つてゐる奴等は龍野の此見幕に恐れて途を開いたから龍野はつと進入りながら自分の家來であるかの如く其内の一人の肩を叩き。

『男爵の處に案内して呉れ』

其男は土語で以て何事かをつぶやいたが今かた後ろの扉を閉めた門番の男より外には佛蘭西語を知らないらしい。

門番『それは貴下の御勝手になさい』

彼は氣味の悪い笑を浮べて斯う云つた、そして獨語の樣に。

『曾つて其たら己らの忠告を聞いてゐれば好かつたと後悔するだらうよ』

朝鮮稗史 林慶業の傳 (三)

浪嘯生譯

甲子年八月冬至使を明國南京に派遣すべきの廷議あり使者として吏曹判書李時白之れを命せられ行裝既に整ひたる時再び廷議ありて曰く上使萬里の他國に赴く途次の險艱に加ふるに刻下四方擾亂の際危險極りなきものあり宜しく武班中に智勇兼備の忠臣を擇び軍官として隨伴警衛の任に當らしむ可るべからずと此時滿廷の各官齊しく相奏して當今武班中斯る重任を負ふに堪るの人を求むるに前年鐵馬山城修築の折其撰に擧げられたる同城の中軍林慶業を措て他に其人を撰むべくもあらず宜しく大命を此人に下さるるあを然るべけれと白す上之れを嘉納せられ直ちに召還の命あり傳敎使を慶業に馳せて此旨を傳へらる慶業命に接し感泣地に伏して其鴻恩の渥きを謝したるに傳敎使再び足下の文武智勇は朝廷百僚悉く之れを知る處大命の下る誠に理なきにあらず想ふに万里の遠程其艱難察すべきものあり足下幸に自重せらるべしとあり慶業謹み答へて外臣邊陬の賤民既に寸分の功なくまて過分の食祿を給はるのみならず殊に此大命を辱ふす天恩の優渥なる何を以てか其萬一に報ね奉るべきや唯た誠心誠意大命を奉じて進はざらん事を期するあるのみと申しければ傳令使より改めて御酒を賜はり並に上使軍官に除せられたり

此夜李判書も亦た慶業に急使を送つて曰く足下嚮に千里の地に去つて逸城路を修築するの重任に膺ひ今又た滿廷の推薦により上命を奉じて共に萬里の行途に就かんとす李榮世に傳ふるに足るものあり宜しく急に行李を整へ速に入京せらるべしと慶業直に發て於傳敎使に向つて累次昇官の恩命を謝し且つ言ふ食祿の臣如何か王命を狂ぐべき假令水火の中と雖も斷じて避くる所にあらず大監の行次は(李判書の一行を指す)小臣に取りて千載一遇の幸機なりと申しければ上使之れを聞き忠義精節の士とは誠に此人をあを云ふべけれと心中大に感激を禁なしたりける

慶業已に其故鄕を辭し老母の壽を祝したる後弟任家眷を集め盛宴を張りて離別の情を序し急ぎ闕下に到り上使と共に王前に拜辭し夫れより愈々万里長程の使途に上りぬ斯くて一行は途を急ぎつゝ水陸幾多の艱苦を嘗め盡し十有餘月を經て漸くに南京にぞ到着しける明廷にては一行が捧ぐる所の國書を受取り世子命を接待使として禮儀を爲ふして遠路の勞を慰められ迎接殊に至らざる隈とて無かりける世子命は當時天下の名將にして明朝都督の重臣を兼ぬるの人物(?)鮮使臣林慶業に接し其風姿の勝れたるを見て大に驚く所ありしが暫くして若干の兵書を出し事に托して慶業の才力を試するに及んで愈々其才識膽氣共に非凡の英雄なるを知り感歎止まず李判書に謂て曰く貴國軍官の容貌を觀るに眉間廣濶にして胸裏に絶代の智勇を蓄ふ眞に之れ曠世の英傑誠に之れ千古の名將なりと李判書答へて小國の匹夫固と不才愚ぞ敢て賞讃を受くるに當るべき然るに斯くも意外に懇篤なる詞を辱ふす軍官の幸榮小使の面目何物かこれに過ぐるものあるべきやと謝したりける